NHKの大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺～」の主人公の一人、金栗四三（かなくりしそう）は熊本県和水町（なごみまち）で生まれ、後半生の多くを玉名市で暮らした。金栗四三が名誉市民第一号の玉名市では1月12日に「いだてん大河ドラマ館」がオープン、市立歴史博物館こころピアでも「金栗四三展」が開かれている。日本の近代スポーツ史に大きな足跡を残した金栗四三とそのふるさとについて、玉名市立歴史博物館こころピア学芸員の村上晶子さんに話を聞いた。（多田則明）

いだてん金栗四三のふるさと玉名市

嘉納治五郎と出会い マラソンの道へ

村上晶子・玉名市立歴史博物館こころピア学芸員に聞く

金栗四三の等身大パネルと村上晶子さん

村上晶子さんは玉名市の生まれ。金栗四三と同じ熊本県立玉名高校を卒業し、鹿児島大学法文学部で中世史を専攻、熊本大学大学院文学研究科国史専攻を修了。昭和60年に玉名市史編纂室に入り、10年後に市立歴史博物館こころピア学芸員となる。

大河ドラマは予想外

――金栗四三が大河ドラマの主人公になるとは？

予想していませんでした。金栗さんは玉名市の名誉市民なので、本館でも平成12年に遺族から遺品の提供を受けて企画展示をし、以後、毎年、金栗杯玉名ハーフマラソンに合わせて、「日本マラソンの父」、地元の偉人として顕彰を続け、ストックホルムオリンピック100年の2012年には大きな展示会を開きました。しかし、まさか大河ドラマの主人公になるとは思っていませんでした。地元の皆さんもびっくりしたと思います。

――昨年5月の地元でのロケでは多くの市民の方が参加しました。

多くの方がエキストラに応募して、とても楽しくロケに参加したようです。

――マラソン界ではよく知られていたそうですが、地元ではどうでした？

小学校では道徳教育用の郷土資料「熊本の心」に金栗さんが紹介されていますから、子供たちはかなり知っています。でも、1983年に92歳で亡くなってから40年近く経ちますから、知らない人が多く、ハーフマラソンの金栗杯と金栗四三が結び付かなくなってきていたのが実情です。

本館では、特に子供たちに金栗さんのことを知ってもらうために、「日本マラソンの父　金栗四三すごろく」を作って、遊びながら金栗の生涯や功績を学べるようにしています。

――金栗さんは肥後もっこすですか？

そうですね。それは明治生まれの人ですから、純粋で真っ直ぐでひたむき、これだと決めたらまっしぐらに進むような人です。

――何度も挫折しながら立ち直り、次の目標に向かって進んでいます。

非常に前向きで、挫折しても新しい目標を見いだし、また進むということを繰り返しています。

――そんな金栗さんを支えた女性たちがいました。

金栗さんは玉名市の池部家に結婚して養子で入りますが、ほとんど東京暮らしでしたので、夫人とは別居状態が長く続きました。それでも、夫人や養母は金栗さんのことをよく理解し、物心両面で支えています。それがあったからこそ、東京であれだけの活動ができたのだと思います。

金栗さんは教職に就いてはいましたが、各地に遠征したりする経費は給料だけでは足らず、家からかなりの仕送りを受けていました。金栗さんが養子に入った池部家は玉名の地主で、それだけの財力があったわけです。しかし、戦後の農地解放で多くの農地を失うことになります。

――金栗さんにとって嘉納治五郎との出会いが大きかったようです。

生家から小学校までの往復12キロの駆け足通学がマラソンの基礎になったのは確かですが、その後、東京高等師範に進み、嘉納治五郎校長に出会ったことが、金栗さんをマラソンの道へと向かわせます。嘉納校長から近代スポーツのあり方についていろいろ学んだことが、金栗さんの生涯を決めたように思います。人間形成のためのスポーツという嘉納の考え方や生き方に共感し、金栗さんもスポーツの世界に入っていったのでしょう。

女子スポーツを振興

――東京高等師範に進み、教育者になったことも大きかった。

そうですね。教育者になって後進を育てるようになります。特に、それまで運動に馴染んでいなかった女学生のスポーツ教育に尽力しました。

金栗さんはオリンピック出場などで世界のスポーツを見てきています。ストックホルム大会でも女子の競技があり、多くの女性がスポーツ観戦をしている光景も目の当たりにしています。その後、アントワープ大会とパリ大会に出場したときも、ヨーロッパ各地をめぐり、女性がスポーツを楽しんでいるのを見て、日本でも女性のスポーツ教育が必要だと感じたのだと思います。日本人のスポーツ力を向上させるには、男性だけでなく女性の体力を高めることが不可欠だと考えるようになったのでしょう。

――女学生と一緒に富士登山もしています。

テニスやマラソンも一緒にしています。最初は親御さんたちから、お転婆になる、色が黒くなってお嫁に行けなくなるなど反対されたようですが、金栗さんには信念がありましたから、根気強く説得し、勧めています。スポーツを通して女子の体力が向上し、朗らかになることで、成績もよくなっています。そうした成果を見て、周りの人たちも次第に理解するようになりました。

――金栗はマラソンの選手層を拡大するために駅伝競技を発想します。

マラソンは一人で走る孤独な競技ですが、それをチームを組んで一緒に走るようにすれば、競争心が高まり一体感が芽生え、選手層のすそ野が広がるのではないかと考えたのです。とりわけ大学間の対抗駅伝になると、ライバル意識が高まりますから。

――晩年の金栗さんは健康マラソンの普及に尽力します。

1972年に結成された「熊本走ろう会」の初代名誉会長になるなど、年配者が健康のために走ることにも力を入れていきます。健康のためのスポーツに熱心で、新婚当時の夫人への手紙では、健康のために体を動かすように勧めています。

――女性や下位の人にも同じ目線で接する金栗さんは九州男児には珍しいのでは。

男尊女卑の時代の日本に育ったのですが、やはり外国を体験したことが大きかったのではないでしょうか。オリンピック出場の後、多くの国のいろいろな場所を訪ねています。アントワープ大会の後は第一次世界大戦後のヨーロッパを見て、戦争の悲惨さを実感していて、それが金栗さんの戦争観にもつながっています。金栗さんは物事や人を広く均等に見ることのできる人です。若い男性だけでなく女性や子供、高齢者など、どこにでも目が届いています。だからこそ、いろいろな人にスポーツを広めたいという活動になったのだと思います。

――75歳でゴール

――心温まるエピソードが、ストックホルム大会から55年の1967年に、スウェーデンオリンピック委員会から記念行事に招待されたことです。ストックホルム大会での金栗さんは、「消えたマラソン選手」として一種のミステリーとして大きな話題になっていましたから。

レース半ばで暑さのため意識を失い、途中棄権になっていた金栗さんにゴールテープを切らせてあげたいという、スウェーデンオリンピック委員会の温かい気持ちですね。そのため、当時、ストックホルムではいろいろな人が金栗さんを探していて、最終的に招待状が届き、75歳の金栗さんがそれに応じたのです。

半世紀ぶりにストックホルムの五輪記念陸上競技場を訪れた金栗さんは、大観衆の中で10㌔ほど走り、ゴールテープを笑顔で切りました。すると、「日本の金栗選手、ただ今ゴールイン。記録は通算54年と8月6日5時間32分20秒3。これをもって第5回ストックホルムオリンピック大会の全日程を終了します」という場内アナウンスが流されたそうです。

――とても好意的ですね。

金栗さんが初参加したときも、日本はアジアで最初のオリンピック参加国としてとても歓迎されました。その日本のマラソン選手がレース途中で行方不明になったというので、大きな話題になったのです。

――日露戦争で勝った日本に対する関心の高さもあったのでしょう。それに、日本が参加することで、オリンピックの理想である5大陸の大会になりましたから。

だから、ストックホルムでは大歓迎されています。

――大河ドラマ効果で玉名の知名度が上がりそうです。

県外の人には、玉名ってどこ、熊本のどこにあるのと聞かれることがありましたから。玉名市には夏目漱石が名作『草枕』の舞台にした温泉があり、九州新幹線の新玉名駅もできましたので、観光客が増えるのを期待しています。11月23日の勤労感謝の日には「玉名大俵まつり」があり、ドラマでも出てくる「俵ころがし」のレースがあります。

『草枕』の舞台になった玉名市天水

◀玉名市にある金栗四三の墓

玉名市にある金栗四三の住まい

◀金栗四三すごろくを楽しむ親子

和水町「金栗四三ミュージアム」

嘉納治五郎の展示

玉名市「いだてん大河ドラマ館」の入り口

九州新幹線新玉名駅に立つ▶
金栗四三の銅像

和水町にある金栗四三の生家

〔連載〕

キリスト教で読み解く ヨーロッパ史 5

宗教研究家
橋本雄

ロシア正教はロシア人の魂

ソボールノスチ

ロシア正教の教会に入っての第一印象は「暗さ」ではないだろうか。窓が少なく暗い聖壇の中で、正面の祭壇に五段に分けて描かれたイコン（聖画）が人々を圧倒する。祭壇の奥には、誰もが入れるわけではない至聖所がある。息苦しいほどの雰囲気の中で、暗がりに揺れる無数の小さなロウソクの火とひたすら祈る老婆の姿は、なんと表現したらいいのであろうか！

そして正教の教会には、西欧の教会に見られるベンチ椅子がないことに気がつく。教会儀式に参加した人々はひたすら立ち続けているのである。

宗教儀式は重々しい司祭のバリトンの声と、聖歌隊の合唱が奏でる独特な雰囲気の中で進んでいく。特に司祭の説教があるわけではなく、人々は神の「言葉」よりも神の「恩恵」を求めているようだ！

これらの教会儀式の「場」である聖壇（ソボール）は母の胎内と理解され、儀式では神とキリスト、聖霊との一体感、そして新生の恩恵の体験が最も重要である。さらに信徒同士の一体感で、これらを「ソボールノスチ」（精神的一体感）という。そして一人ひとりが司祭に告白し、イコンに接吻をして「許し」と慰安を受ける。「ロシアの悲しみは神以外は癒やせない」と言われる歴史に生きるロシア人が、信仰に求めているものは「許し」、安息、そして祝福」だ。

モスクワは第三のローマ

ロシアは長くモンゴルなど中央アジアの他民族の支配下にあった。「タタールの軛（くびき）」と言われる270年間（13世紀から16世紀）、西欧との交流が途絶える状態にあった。従ってルネサンス（14世紀から17世紀頃）や産業革命などに乗り遅れてしまった。「ロシアは遅れている」と言われる所以である。

そのロシアで「モスクワは第三のローマで、多民族の救済の使命がある」という考えが、1510年に修道僧フィロフェイによって唱導された。エルサレムもコンスタンチノープルも異教徒により破壊され、人類救済と天国実現の使命はロシアにもたらされた、とする考えである。実際、コンスタンチノープルが滅んだ時に多くのビザンチン文化がロシアにもたらされた。「モスクワ＝第三のローマ論」はロシア人の心の中に深く染み込んでいる。

ロシアの歴史を学ぶと、何度も侵略されたことに気がつく。東からはモンゴル、南からはトルコやイスラム勢力、西からはリトアニアやフランス、ドイツなど、北からはスウェーデンが侵入してきた。その度に人々は逃げまどい、犠牲となってきた。

王朝ができても、強権独裁や帝政の圧政が続き、人々は苦しんだ。そして恐ろしいほどの寒さに襲われる長い冬……豊かではあるが過酷な大自然の脅威がいつもそこにあった。このやりきれない苦難や悲しみが、ロシア人の心情と文化の根底に流れている。

「なぜ神はロシアにこんなに苦しみをくださるのか」という深い自問と嘆きが、ロシア人の根底にある。自分の力ではどうしようもない現実に対して、半ば諦めの「受け身の魂」がある。

過酷な現実に耐えて生きてきたロシア人は、神とキリストの中に「限りない従順と自己否定・ケノーシス」を見つけた。新約聖書ピリピ人への手紙2章7節にある一節がそれで、神は自己を否定し、受肉してキリストとなられ、そのキリストも自己否定の道、へり下りの道、十字架の道を行かれたのである。

やがてケノーシスは、隷従や服従によって救われるという考えとなった。神やキリストに、ロシア人は自分自身と民族の置かれた屈従と苦難の歴史を重ねたのである。暴虐な支配者や共産主義指導者らの強権に対する際限のない屈従と自己否定も、ある意味でロシアの姿なのである。

このケノーシスの精神で、多大な犠牲を払った大祖国戦争（第二次大戦をこう呼ぶ）を戦い抜き、ナチズムを滅ぼしたのは自分達であるという自負心もロシア人にはある。ベルリン包囲戦でヒトラーを自殺に追い込んだのはソ連軍であった。この精神は、日本の滅私奉公の精神に通じるものがある。

このようなロシアの精神風土が生んだ名画が、モスクワのトレチャコフ美術館にある巨匠イワン・クラムスコイの「荒野のキリスト」である。

40日断食が終わった翌朝であろうか、遠くの山に日の出の明かりが指している。砂漠の夜は寒い。毛布を纏ったキリストが荒野の果てを見つめている。その表情は、人類の苦難を一身に背負っているかのようだ。

世界救済の使命

1917年のロシア革命は、レーニンを指導者とするマルキストのクーデターであった。従って、ボルシェビキ政権はロシアを「解放」したのではなく「支配」したのである。その統治は過去の強権体制と同じであり、ボルシェビキ政権は多くの人々を殺害し恐怖政治を行った。

ロシアの民衆の苦難は一層激しいものとなった。

一方で、「マルクス主義という最先端の科学的理念」を実現したという高揚感も、一部の共産主義者は持っていた。歴史上初めて共産主義社会を実現したロシアは、世界の最先端になったという幻想を抱いたのである。そこに「モスクワ＝第三のローマ論」という情念が結びついたという。世界を救済する使命は世界を赤化する野望へと変わった。それがまるでロシアの歴史的使命であるかのように！

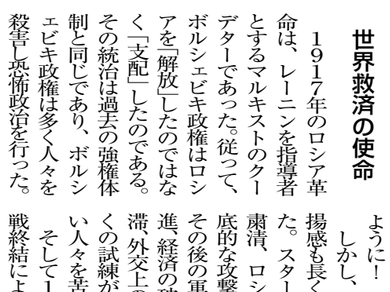
しかし、そのような高揚感も長くは続かなかった。スターリンの圧政と粛清、ロシア正教への徹底的な攻撃、破壊と殺戮。その後の軍事強国への邁進、経済の破綻、文化的停滞、外交上の失政など、多くの試練がソビエトを襲い人々を苦しめた。

そして1991年の冷戦終結により、ロシアは再びどん底に落とされてしまった。縮小する領土、瓦解する国家の中で、人々は自信を失い、経済的苦闘に喘いだ90年代であった。ソビエトが最も進んだ体制・文化と信じてきたものが全て崩れてしまったのである。

復活するロシア正教

新しいロシアは今、国民のアイデンティティをロシア正教に求めている。国民の精神的支柱として、ロシア正教の役割は大きくなっている。西洋では人々の信仰心が希薄になっているが、ロシア正教は積極的に社会奉仕や貧しい人々の救済活動などの社会活動に注力しているのである。

しかし激しく変化する現代世界の中でロシア正教は、過去と現在の歴史の悲しみを癒やして自信を取り戻し、人々を再び立ち上がらせることができるであろうか。



ロシア正教の教会